

米国における看護教員の授業力向上の取り組み

池内 里美, 合田 友美¹⁾, 木原 俊行²⁾, 西田 好江³⁾

KEY WORDS

U.S. nursing instructors, teaching skills, classes, training

はじめに

日本では、看護系大学や看護学生の急増の一方で、退学する学生や新人看護師の離職の問題等により、看護基礎教育のより一層の充実が求められている。そのため、看護教員の質の向上を目的とした看護教員の継続教育の必要性とその検討が課題となっている。今後の看護教員のあり方に関する検討会では、看護師養成所内において Faculty Development (以下 FD と略す) の一環として、教育能力開発に取り組む必要性が示されている¹⁾。また、文部科学省の中央教育審議会第 82 回総会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」の答申(2012)では、グローバル社会の高等教育において、課題解決型の能動的学習であるアクティブ・ラーニングへの取り組みの発展と展開が期待されている²⁾。アクティブ・ラーニングという観念は、もともと米国で確立し、日本に導入されたものである³⁾。教員主導の知識伝達を中心とした従来型の授業しか受けたことがない教員にとって、学習者の自立性を尊重した新たな授業形態をイメージし、デザインすることは困難であり⁴⁾、看護教員においては、それらの能力を習得するための継続教育の体制も十分とは言えない現状がある¹⁾。

近年、米国を中心に学び続ける組織をいかに構築するか、その組織をいかにして発展・維持させていくかという学校組織の学習共同体に関する研究が進展している⁶⁾。米国では、看護教員の教師養成プログラムの不足や限定的な FD という背景から、看護教育者自身が、教育実践を振り返ったり改善したりすることができるよう組織的な支援の提供が推奨されている⁵⁾。そ

のため米国では、個々の看護教員や看護師養成機関においてアクティブ・ラーニングなどの学習者の自立性を尊重した授業展開が活発に行われているものと予測される。

日本では、戦後米国よりもたらされた看護教育によって、その基盤がつくられ⁷⁾、その後も看護理論や看護診断など、米国の影響を受けながら発展してきた。こうしたことから、日本の看護教員の授業力向上への取り組みと組織的支援のあり方についての示唆を得るために、本研究では、米国の看護教員が、授業力の向上に向けてどのような取り組みを行っているのかを明らかにすることを目的とした。

本研究では、授業は、講義・演習・実習にとどまらず、教育的なかわり全般をふくむもの⁸⁾と定義する。吉崎は、教師の授業に対する能力を授業に関する信念、授業についての知識、授業についての技術の 3 つの側面で捉えている⁹⁾。本研究では、看護教員の授業力を授業に関する信念、授業についての知識、授業についての技術と定義する。

方法

1. 研究デザイン

本研究は、質的帰納的研究デザインとした。質的研究は、研究参加者の見方に入り込み、関心のある現象について自然な文脈の破壊を最小限にしながら探求することができる方法である¹⁰⁾。この方法を用いることで、米国の看護教員の授業力向上のための取り組みの特徴について、研究参加者の視点からありのままに理解することができると考えた。

金沢医科大学 看護学部

1) 宝塚大学 看護学部看護学科

2) 大阪教育大学 大学院連合教職実践研究科

3) 泉佐野泉南医師会看護専門学校

2. 研究参加者

研究参加者の募集は、第二著者及び第四著者の知人が勤務する米国のテキサス州にある1か所の4年制看護大学、およびカリフォルニア州にある1か所の4年制看護大学と1か所の看護短期大学に依頼した。研究参加者の選定基準は、1) 授業力を高めるための研修を大学内で企画・運営している教員、または2) 授業力を身につけるために大学内または大学外での研修に参加したことがある教員で、本研究に協力可能な方の2点である。

3. データ収集期間

2015年5月から同年9月

4. データ収集方法

インタビューは、研究参加者が勤務する看護師養成機関の個室または米国のホテルの個室で、面談またはテレビ電話によって行った。なおインタビューは、第四著者または専門家による通訳を介して、第一著者と第二著者が行った。インタビューは、「授業力を高めるために取り組んでいること」などインタビューガイドに沿って、半構成的面接を約30分から90分実施した。インタビューでの発言は、研究参加者の許可を得て、ボイスレコーダーに録音した。

5. 分析方法

分析は、北・谷津¹⁰⁾の方法を参照して以下の手順で行った。まず音声データを逐語録化し、逐語録を繰り返し精読した。そして、米国の看護教員の授業力向上のための取り組みに着目しながら、データを意味が損なわれない範囲で区切りコード化した。次にコードを意味内容の類似性・差異性に基づいて分類し、サブカテゴリーを抽出した。さらにサブカテゴリー同士を比較・分類し、カテゴリーを抽出した。

6. 真実性の確保

結果の真実性を確保するために、データは、第一著者がコード化を行った後、全著者で審議し、サブカテゴリー、カテゴリー化を行った。また分析結果については研究参加者に提示し、結果が研究参加者の意図と相違ないことを確認した。

7. 倫理的配慮

本研究は、研究者の所属機関の医学倫理審査委員会にて承認を得た(承認番号:15-02)。この研究は、人を対象とする医学研究の倫理原則¹¹⁾に従って行った。研

究参加者には、調査の目的、方法、プライバシーの保護、調査への参加および撤退の自由などについて、調査の書面および口頭による説明を行った後、書面による同意を得た。

結果

1. 参加者の概要

参加者は合計7名であり、うち2名は4年制看護大学、5名は看護短期大学の看護教員であった。教員経験年数は、5年から25年であった。

2. 分析の概要

7名のインタビューから、授業力向上のための取り組みに関する104の文脈から29個のサブカテゴリーと9のカテゴリーが抽出され、カテゴリーは、学外の取り組み、学校組織の取り組み、教員個々の取り組みの3つの側面に分類された(表1)。

3. カテゴリーの内容

以下に、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは<>、生データを「」で表す。

1) 学外の取り組み

このカテゴリーの側面は、継続教育などの学外の取り組みのことであり、【州で義務付けられた継続教育】と【豊富な研修内容の提供】の2つのカテゴリーで構成された。

(1) 【州で義務付けられた継続教育】

州で義務付けられた継続教育における単位取得に関する取り組みであり、<通信やインターネット研修を自由に組み合わせる><学会・研修の単位を互換する>という2つのサブカテゴリーで構成されていた。

<学会・研修の単位を互換する>例

「2年ごとに20時間の単位の継続教育を履修する必要があります。学会参加やプレゼンテーションの経験も、認められれば州の単位に互換してくれます」

(2) 【豊富な研修内容の提供】

米国では、継続教育の履修が必須であることから、看護協会や大学等で豊富な研修内容が提供されていた。<アメリカ看護協会による無料研修を受講する><教育学や哲学を履修する>という2つのサブカテゴリーで構成されていた。

<教育学や哲学を履修する>の例

「教育学に関するコースもあり、教育理論や教育方法が学べます」「学生への発問やどのように答えさせることが良いのかを学びました」「看護や哲学の勉強が、最も勉強になりました」

表 1. 米国における教員の授業力向上のための取り組み

側面	カテゴリ	サブカテゴリ	コードの一例	
学外の取り組み	州で義務付けられた継続教育 豊富な研修内容の提供	通信やインターネット研修を自由に組み合わせる 学会・研修の単位を互換する	州で義務付けられた継続教育は、通信やインターネットの研修を自由に組み合わせて履修できる 学会のセミナーや学内の研修会を実施した場合も申請により単位互換される	
		アメリカ看護協会による無料研修を受講する 教育学や哲学を履修する	アメリカの看護協会が主催する無料の研修に出ると10時間になる 教育学コースの教育概念、理論、教育方法についての単位は、看護教員になる前に取得できる	
学校組織の取り組み	教員の自立支援体制の整備	メンタリングにより若手・新人看護教員を育成する 看護学生のためのハンドブックを活用する 授業コースのチェックリストを策定する	新人看護教員を対象にメンタリングシステムがあり、教育以外のこともサポートしている 看護プログラムや学校のルールに関する情報が掲載されている 授業のコースについてのチェックリストに沿ってメンターが新人看護教員に指導をしている	
		学習の機会の確保	授業改善のための学内会議を開催する 学会や研修参加費の助成を受ける 国内外から講師を招聘する 看護学部長から情報が提供される	学校を良くしていくための一つとして授業改善の話し合いが会議で行われている 研修参加費を大学が負担してくれることもある ワークショップの開催校がテーマを決めて海外などから外部講師を招聘している 学生が多角的に学ぶようにするための方法を他の看護教員にも伝えている
			授業評価の機会の確保	地域との繋がりを意識して他校と連携する 年一回の授業参観と評価レポートを義務づける 看護学部長による全看護教員への授業参観と助言 自己評価と学生評価を分析する
	教員個々の取り組み	学生の主体性を育む授業構想	学生参加型の授業 事前学習への意欲と機会を工夫する シミュレーションを活用した効果的な教育方法を開発する	看護教員ばかりが話す授業にならうようにアクティブラーニングや反転学習を取り入れている 学生に事前学習をどれだけさせることができるかが看護教員の力として大事である 批判的思考と臨床判断を強化するためにシミュレーション方法を開発している
			学生の目線に立った教育	楽しい学習体験を取り入れる 学生の自信や効力感を引き出すことを大切に 学生個々の力を育む方法を考える 学生が人前で恥ずかしい思いをしないように配慮する
		授業改善のための対話		看護教員間の自発的な授業参観とリフレクションの機会をもつ 授業を担当した看護教員に敬意を伝える ベテラン看護教員から吸収する もらった助言を授業改善に活かす
看護師かつ看護教員として情報をアップデートする			看護分野の知識を維持する 授業方略を学ぶ 看護師としての責任を意識する	学生が安全な患者ケアに関する最新情報を確実に受け取るようにする 授業をアクティブにしていくための方法は、20年以上の看護教員経験のなかで思考していった 看護師である以上、新しい情報をアップデートしていく責任がある

2) 学校組織の取り組み

このカテゴリの側面は、学校組織の取り組みのことであり、【教員の自立支援体制の整備】、【学習の機会の確保】、【授業評価の機会の確保】の3つカテゴリで構成された。

(1) 【教員の自立支援体制の整備】

看護教員の自立や臨床診療から教育への移行をサポートするためのシステムが学校組織の取り組みとして整備されていた。＜メンタリングにより若手・新人看護教員を育成する＞＜看護学生のためのハンドブックを活用する＞＜授業コースのチェックリストを策定する＞という3つのサブカテゴリで構成されていた。

＜メンタリングにより若手・新人看護教員を育成する＞の例
「メンタリングのシステムは、新人看護教員のためのものです」、「臨床ですごくスキルが高い看護師でも、教育のバックグラウンドがないと授業が下手で学生が聞いてくれず落ち込んで辞めていくことになるので、必ずメンターが必要です」

(2) 【学習の機会の確保】

学校組織として個々の看護教員の授業力を高めるために教育に関する学習の機会が確保されていた。＜授業改善のための学内会議を開催する＞＜学会や研修参加費の助成を受ける＞＜国内外から講師を招聘する＞＜看護学部長から情報が提供される＞＜地域の繋がりを意識して他校と連携する＞という5つのサブカテゴリで構成されていた。

＜授業改善のための学内会議を開催する＞の例

「授業のトピックがあれば、教員会議で授業を良くするための方法について話し合うこともあります」

＜看護学部長から情報が提供される＞の例

「学生が多角的に学ぶための情報を他の看護教員に伝えるようにしています」

(3) 【授業評価の機会の確保】

学校組織として個々の看護教員に授業評価の機会が確保されていた。＜年一回の授業参観と評価レポートを義務づける＞＜看護学部長による全看護教員への授業参観と助言＞＜自己評価と学生評価を分析する＞という3つのサブカテゴリで構成されていた。

＜年一回の授業参観と評価レポートを義務づける＞の例

「授業を見学したら、それを振り返ってレポートを書くことが義務付けられています」

＜看護学部長による全教員への授業参観と助言＞の例

「予告なしに授業に入って、授業を担当した教員に気づいたことについて伝えています」

3) 教員個々の取り組み

このカテゴリの側面は、看護教員個々の取り組みであり、【学生の主体性を育む授業構想】、【学生の目線に立った教育】、【授業改善のための対話】、【看護師かつ看護教員として情報をアップデートする】の4つのカテゴリで構成された。

(1) 【学生の主体性を育む授業構想】

米国の看護教員は、学生の主体性を育むために様々

な観点で授業構想に取り組んでいた。〈学生参加型の授業〉〈事前学習への意欲と機会を工夫する〉〈シミュレーションを活用した効果的な教育方法を開発する〉という3つのサブカテゴリーで構成されていた。

〈学生参加型の授業〉の例

「学生が主体的に学習する方法としてアクティブ・ラーニングや反転授業をしています」

(2) 【学生の目線に立った教育】

米国の看護教員は、学生の目線に立った教育に取り組んでいた。〈楽しい学習体験を取り入れる〉〈学生の自信や効力感を引き出すことを大切にする〉〈学生個々の力を育む方法を考える〉〈学生が人前で恥ずかしい思いをしないように配慮する〉という4つのサブカテゴリーで構成されていた。

〈楽しい学習体験を取り入れる〉の例

「真面目に一生懸命あれもこれもと教えたときは、みんな退屈そうな顔をしているのもっと面白いレクチャーで笑わせて、その記憶と学習が繋がるようにしています」

(3) 【授業改善のための対話】

米国の看護教員は、授業改善のために同僚との対話に取り組んでいた。〈看護教員間の自発的な授業参観とリフレクションの機会を持つ〉〈授業を担当した看護教員に敬意を伝える〉〈ベテラン看護教員から吸収する〉〈もらった助言を授業改善に活かす〉という4つのサブカテゴリーで構成されていた。

〈看護教員間の自発的な授業参観とリフレクションの機会を持つ〉の例

「授業参観後は、授業の良かったところや改善した方がいいことについてリフレクションをしています」

(4) 【看護師かつ看護教員として情報をアップデートする】

米国の看護教員は、看護師かつ看護教員として常に最新の看護や教育に対する情報をアップデートしていた。〈看護分野の知識を維持する〉〈授業方略を学ぶ〉〈看護師としての責任を意識する〉という3つのサブカテゴリーで構成されていた。

〈看護分野の知識を維持する〉の例

「新しい薬や技術を学習し、常にアップデートしています」

〈授業方略を学ぶ〉の例

「授業をアクティブにしたり学生が主体的に勉強するための方法を学んでいます」

考察

米国の看護教員の授業力向上のための取り組みにつ

いて質的帰納的に分析した結果、学外の取り組み、学校組織の取り組み、教員個々の取り組みがなされていることが明らかになった。各取り組みから見てきた、米国の看護教員の授業力向上の支援の特徴と日本の課題について論述する。

1. 学外の取り組み

米国は、【州で義務付けられた継続教育】制度があり、単位取得の機会として【豊富な研修内容の提供】がなされ、その教育内容は、看護師ライセンスにおける根拠法である各州の Nursing Practice Act の基準によって担保されていた¹²⁾。日本では、FDの企画運営に携わる看護教員が直面している活動上の問題として、「看護教員の多様な学習ニーズを充足させるFDプログラムを企画することは困難である」など¹³⁾、学校単体で運営していくことの困難さが挙げられている。個々の看護教員のニーズに合った学習を計画的に進めて行くためには、各施設等でプログラムされた教育以外の多様な機会(学会、セミナー、通信添削など)を利用するほか¹²⁾、オンライン教育など多様な機会を受講できる仕組みを構築していく必要があると考える。先行研究において米国では、経験豊富な看護師であっても、その学問や臨床的専門知識は、看護教員としての役割理解に役立たなかったことが指摘されている¹⁴⁾。そのため米国の継続教育では、〈教育学や哲学を履修する〉機会が設けられていると思われる。日本では、教育研修の履修の有無がバーンアウトに関連していること¹⁵⁾や、看護教員の教育学や教育論の視点の不足が指摘されている¹⁾との見解もあるため、教育学を履修する機会の設定が重要であろう。

2. 学校組織の取り組み

米国では、【教員の自立支援体制の整備】として〈メンタリングにより若手・新人看護教員を育成する〉ことが行われていた。メンタリングは、個人のキャリア発達における支援機能である¹⁶⁾。米国では、指導・支援関係にある者をメンターと呼ぶメンタリングの概念が発達しており¹⁷⁾、新人看護教員が教員としての役割を果たすうえで、メンターの重要性が示唆されている¹⁸⁾。米国では、看護教員の高齢化等の要因によって看護教員の不足が課題となっている¹⁹⁾ことから、新人看護教員であっても初年度から多くの授業準備や委員会などに関与しなければならない¹⁴⁾。そのため新人看護教員の自立支援に力が注がれ、【学習の機会の確保】や看護教員個々の【授業評価の機会の確保】が設けられており、学校全体の教育力が担保されていた。日本でも、

学生理解や臨地実習指導における指導力と調整力の形成など様々な教育実践能力が求められていることから²⁰⁾、新人看護教員は、教育手法や実習指導方法など大学に研修の機会があることを望んでいる²¹⁾。従って米国の学校組織の取り組みは、新人看護教員への支援のみならず、看護教員の支援として有益であろうと考える。しかし、メンタリングにおいては、看護教員同士のスケジュール調整、人格の違い、その他の理由により、メンター関係は常に良好とは限らないことが指摘されている¹⁴⁾。そのため教員の成長を支援するためのメンタリングのあり方について、さらなる検討が必須であろうと考える。

3. 教員個々の取り組み

米国の教員は、【学生の主体性を育む授業構想】に取り組んでいた。日本でも学生の学習への主体性を促進するための教授活動がなされており²²⁾、学生の主体性を強化することは、日米共通の取り組みである。米国では、マイノリティーの学生が増加しており、多様性やマイノリティーの学生に対する支援が課題となっている¹⁹⁾。そのため【学生の目線に立った教育】の探究が行われていた。そして高い臨床スキルと判断力、親しみやすい性格特性、対人関係を発展させる能力といった学生が望む看護教員²³⁾としての成長を図るために【看護師かつ看護教員として情報をアップデートする】ことに努めていた。またそれは、同僚の看護教員との【授業改善のための対話】によって行われていた。同僚などの他者との対話や共同は、教員の反省的成長を促し、活性化することが明らかにされている²⁴⁾。日本では、新人看護教員が迷いながら業務を実施していく中で、仕事に対する達成感希薄となり、働きがいがないと感じ、自信がなく自分の居場所がない状態に陥っていることが報告されていることから²⁵⁾、同僚との対話のなかで、授業改善のための示唆をえることが必要であろうと考える。その際、<授業を担当した看

護教員に敬意を伝える>ことも同僚との関係を円滑に図るうえで、忘れてはならないことであろう。

本研究は、米国のテキサス州およびカリフォルニア州の3か所の看護師養成機関で参加者を募集した。そのため、参加者は7名とサンプルサイズは小さい。従って本研究によって得られた知見は、米国の看護教員のあらゆるケースに適用できるとはいえない。しかし、米国の看護教員の授業力向上の支援についての特徴を明らかにすることができたことは、日本の看護教員の授業力を高めるための取り組みの示唆を得ることができたと考える。今後は、様々な国内外の看護教員の取り組みについて言及していくために研究を継続することが課題である。

結語

本研究では、米国の看護教員の授業力向上のための取り組みに関して質的帰納的分析の結果、【州で義務付けられた継続教育】【豊富な研修内容の提供】【教員の自立支援体制の整備】【学習の機会の確保】【授業評価の機会の確保】【学生の主体性を育む授業構想】【学生の目線に立った教育】【授業改善のための対話】【看護師かつ看護教員として情報をアップデートする】の9カテゴリーが抽出され、さらに学外の取り組み、学校組織の取り組み、教員個々の取り組みの3つの側面に分類された。こうしたことから、看護教員の授業力の向上には、看護教員が主体的かつ継続的に学べる機会の組織的な体制整備と保障が重要であると考えられる。

謝辞

調査に協力をしていただいたすべての米国の看護教員の皆様、通訳をしていただいた皆様に、心から感謝を申し上げます。本研究は科学研究費助成事業（基盤C15K11535）により行った。

利益相反自己申告：申告すべきものなし

文献

- 1) 厚生労働省 (2010) : 今後の看護教員の在り方に関する検討会報告書, 1-12. <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/02/dl/s0217-7b.pdf>.
- 2) 文部科学省 (2012) : 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて (答申) 平成 24 年 8 月 28 日中央教育審議会, https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf.
- 3) 西岡加名恵 (2017) : 日米におけるアクティブ・ラーニング論の成立と展開, 教育学研究, 84(3), 311-319. https://doi.org/10.11555/kyoiku.84.3_311.
- 4) 藤田裕子 (2010) : 授業イメージの変容に見る熟練教師の成長—自律的な学習を目指した日本語授業に取り組んだ大学教師の事例研究, 日本教育工学会論文誌, 34, 67-76. <https://doi.org/10.15077/jjet.KJ00006440133>
- 5) パトリシアベナー (2013) / 早野 ZITTO 真佐子 : 看護プログラムから教育を改善する, ベナーナースを育てる (第一版), 311-332, 医学書院, 東京.
- 6) 廣瀬真琴 (2014) : 共同的な学習コミュニティとしての学校, 鹿児島大学教育学部研究紀要, 66, 49-59. http://ir.kagoshima-u.ac.jp/bitstream/10232/23218/2/教育科学編_05.pdf.
- 7) 横田知子 (2015) : 米国との比較でとらえる日本の看護教育, 朝日大学保健医療学部看護学科紀要, 1, 33-37, [file:///C:/Users/ikeuchi/Downloads/kangokiyoul_3337_2015%20\(1\).pdf](file:///C:/Users/ikeuchi/Downloads/kangokiyoul_3337_2015%20(1).pdf).
- 8) 目黒悟 (2010) : 看護教育を拓く授業リフレクション教える人の学びと成長, 2-16, 医学書院, 東京.
- 9) 吉崎静夫 (1997) : デザイナーとしての教師アクターとしての教師, 34-35, 金子書房, 東京.
- 10) 北素子, 谷津裕子 : 質的研究の実践と評価のためのサブストラクション, 2009 : 27-33, 医学書院.
- 11) World Medical Association [WMA]. (2013). WMA Declaration of Helsinki-Ethical principles for medical research involving human subjects. (Updated July 2018). Retrieved from <https://www.wma.net/policies-post/wma-declaration-of-helsinki-ethical-principles-for-medical-research-involving-human-subjects/>.
- 12) 菱沼典子, 及川郁子, 小澤道子他 (1999) : 看護の質の確保に関する研究—先進諸国における免許更新制度, 聖路加看護大学紀要, 25, 52-67, <http://hdl.handle.net/10285/349>.
- 13) 亀岡智美, 舟島なをみ, 野本百合子他 (2008), FD 企画運営に携わる看護学教員が直面している活動上の課題, 日本看護研究学会誌, 31, 57-62. <https://doi.org/10.15065/jjsnr.20080919005>.
- 14) Siler and Kleiner (2001) : Novice faculty: Encountering expectations in Academia, Journal of Nursing Education, 40(9), 397-403.
- 15) 片岡三佳, 小澤和弘, 市江和子他 (2008) : 看護系大学に勤務する助手の個人属性, 教員特性および職務満足感からみたバーンアウトに関する研究, 日本看護研究学会雑誌, 31(4), 67-74. <https://doi.org/10.15065/jjsnr.20080517006>.
- 16) Kram, K.E. (1988) / 渡辺直登, 伊藤知子訳 (2003) : メンタリング—会社の中の発達支援関係—: 白桃書房, 東京.
- 17) キャシー・クラム (2003), 『メンタリング: 会社の中の発達支援関係』 (訳: 渡辺直登, 伊藤知子) 白桃書房 (原著 1983 年発行)
- 18) Megel, M.E. (1985) : New faculty in nursing: Socialization and the role of the mentor. Journal of Nursing Education, 24, 303-306.
- 19) National League of Nursing (NLN) : Nursing Education Issues. <http://www.nln.org/>, 2020.3.10.
- 20) 中川名帆子, 山内豊明, 小西正人 (2019) : 看護系大学教員に必要な教育実践能力に関する質的研究, 岐阜聖徳学園大学看護学研究誌, 4, 2189-9525. Permalink : <http://id.nii.ac.jp/1550/00002124/>.
- 21) 一般社団法人日本看護系大学協議会看護学教育質向上委員会 (2011) : 若手看護学教員に求められる資質・能力獲得状況と支援に関する実態と FD 活動の方向性, ファカルティ・ディベロップメント委員会平成 21 年度・平成 22 年度活動報告書, <https://doi.org/10.32283/rep.0cbe16df>.
- 22) 山口幸恵 (2019) : 学生の学習への主体性促進を意図した看護学教員の授業形態別教授活動, 常磐看護学研究雑誌, 1, 27-36. <https://doi.org/10.15065/jjsnr.20160729190>.
- 23) Angela, D. (2017), Characteristics of an effective nursing clinical instructor: The state of the science, Journal of Clinical Nursing Volume 27, Issue 1-2, <https://doi.org/10.1111/jocn.13931>.
- 24) 木原俊行 (2008) : 授業研究と教師教育の連結, 授業研究と教師の成長, 日本文教出版, 17-42.
- 25) 伊藤美鈴 (2012) : 看護系専修・専門学校新入教員の職業的社会化についての経験—教育活動における知覚の明確化, 日本看護学会論文集看護教育, 42, 14-17. <https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000000106459-00>.

Efforts to improve the teaching ability of nursing instructors in the United States

Satomi Ikeuchi, Tomomi Goda¹⁾, Toshiyuki Kihara²⁾, Yoshie Nishida³⁾

Abstract

Purpose: Nursing education in Japan has been influenced by that of the United States. This report presents initiatives undertaken to enhance the teaching ability of nursing instructors in the United States, with the aim of finding ways to improve the teaching ability of their counterparts in Japan.

Study participants: Seven nursing instructors employed at nurse training institutions in Texas and California, USA.

Research period: May to September 2015.

Method: Two interviewers conducted a semi-structured 30-90 minute long interview through interpreters about efforts to improve the effectiveness of classes. Interviews were conducted in a private room of the nurse training institution where the study participants work or by videophone.

Analysis method: A verbatim transcript of the interview was created, and the efforts to improve the effectiveness of lessons were summarized according to the commonality of semantic content. In addition, subcategories, categories, and aspects were extracted. The study was approved by the medical ethics review committee of which the researcher is a member and conducted in consideration of ethical practices such as ensuring anonymity (Approval Number 15-02).

Results: There were found to be 104 contexts in which efforts were being made to improve the teaching ability of nursing teachers in the United States, and these were divided into 29 subcategories. The subcategories were grouped into nine categories, including “state-required continuing education,” “providing plentiful training content,” and “improving the system for supporting teachers' independence.” Finally, these nine categories were grouped into three aspects: off-campus efforts, school organization efforts, and teachers' individual efforts.

Discussion: In the United States, there were comprehensive efforts to improve teachers' teaching ability, including off-campus initiatives, school organization initiatives, and individual teacher efforts. These efforts indicated that in order to improve the teaching ability of nursing teachers, it is important to establish and guarantee a well-organized system of opportunities for nursing teachers to learn independently and continuously.